

唐物茶入に添う彫漆盆利用の特質

Characteristics Observed in the Using of
Carved Lacquer Tray for *Karamono* Tea Caddy

TAHIRA Namiko

多比羅菜美子

はじめに

彫漆とは、漆を塗り重ねた層に文様を刀で彫りあらわす漆工技法である。文様は浮き彫り状になることから、器表には当然のことながら凹凸がある。そのため彫漆には、箱や合子といった蓋物や、盃台のような立体的な器物が多く制作されたと考えられるが、わが国の伝世品に思いのほか多くみられるのが盆である。平らな見込みの上に物を載せる盆は、器表に凹凸がある彫漆では、上に載せる物の安定性を欠くため不向きではないかと考えがちであるが、盆の伝世品は多いのが実態である。象徴的なことに、室町時代以降わが国でことに重宝された唐物茶入は、同じく唐物である彫漆の盆に載せて飾る場合が多い。例えば、南宋から元時代頃に制作された「丸壺茶入 銘青山」(図1 根津美術館蔵)には、元時代の「堆朱楼閣人物文盆」が付属している。唐物茶入に盆を添えるのは、日本で取り合わされたものである。唐物茶入は希少であるために、茶入を載せる盆の安定性は厳しく吟味されたと思われる。漆でできた厚い層に文様を浮き彫りにする彫漆の盆は、繰り返しになるが器面の凹凸がある。それでもなお茶入盆に用いられているのは、彫漆の研究を始めた当初、筆者には意外に思われた。しかしながら、実際に茶入を載せてみると、安定して物を載せることができ、それも驚かされたことであった。浮き彫りで文様を表す彫漆の盆が、使用に堪える実用的な器表の安定性を備えている大きな理由は、その文様構成の工夫にあると推測している。本稿では茶入盆を例に、彫漆の文様構成にみる実用的な工夫についてみてみたい。

1. 彫漆の種類

彫漆の種類は、次の三つの要素から分類されている。

1. 器面表層の色
2. 文様
3. 漆層の配色

彫漆は漆を幾度も塗り重ねた厚い漆層をもつので、漆層を形成する漆の色は多色の色漆で塗り重ねることができる。彫漆器が唐物として重宝されていた室町時代には、さらに彫りの深さ、浅さ、彫り方の特徴など、さらに細やかな分類がなされ、価値付けと直結して精細に鑑別されていた。室町時代の故実書『君台観左右帳記』では、十二種類の彫漆の分類があり、現在ではどのような作品

を指しているのか分からない名称もある⁽¹⁾。彫漆の分類は、南宋時代頃の作品が最も漆層の厚さ薄さ、配色、文様の彫り方などのバリエーションが多く、元時代、明時代と時代が降るにつれ、朱や黒の漆を単色で厚く塗り重ね、文様を深く彫り込んで表すような表現に移り変わっていく。それに伴い、日本に将来される彫漆も単色のものが多くなり、さらに唐物としての彫漆の価値が国内で定常化するにつれ、彫漆の分類は大まかになり、近世に入ると漆の色に着目した、次の五種類程度の分類に定着したようである。

- ①堆黒
- ②堆朱
- ③犀皮
- ④存星
- ⑤紅花緑葉

①と②は漆層の最表面が黒あるいは朱漆である。③は漆の積層が朱と黄を交互に塗り重ねた上に黒漆を塗り、香草文や雲文を彫り表したものと考えられてきたが、その名称が意味するところの技法がどのようなものであるのかは、未だ学会でも議論が錯綜している⁽²⁾。④は技法的には彫漆のほか填漆技法でもこの名で呼ばれてきた作品が含まれているが、いずれも緑や黄・朱・茶（透漆）といった複数の色漆を用いているのが特徴である。今日では、⑤の紅花緑葉を含めて、複数の色漆を用いた彫漆器は、彫彩漆と呼んでいる。存星と呼ばれている彫彩漆は、製作が南宋時代に遡る「蒲公英蜻蛉文彫彩漆香合」（九州国立博物館蔵）や「狩獵凶彫彩漆長盆」（徳川美術館蔵）などから、堆朱や堆黒など単色の彫漆器と同様に長い歴史をもつものである⁽³⁾。⑤は、明代に盛行した技法で、青（緑）漆と朱漆の漆を各々厚く塗り重ね、文様を彫り出す高さを変えて、緑色の葉をつけた朱色の花文を表すような、同じ器面に2色以上の漆層を露出させる色の対比が特色である。

2. 彫漆の文様

彫漆の文様は、大きく分けて幾何学文と具象文に分かれる。幾何学文には、いずれもわが国では屈輪文とよばれている、如意雲文をモチーフとした文様あるいは香草文系の文様が多い。屈輪文は、文様が整然と何段にもわたって彫り表されて器面を埋める。具象文には、花卉文、花鳥文といった動植物をモチーフにした文様のほか、楼閣人物文とよばれる元来は故事などに取材した人物文が多い。

3. 彫漆の文様構成

文様の構成は盆や合子の別なく、また幾何学文、具象文にかかわらず、原則として盆の見込みや蓋甲の中心から放射状に配置されている。まず、幾何学文である屈輪文をみてみよう。明時代初期の制作とみられる「堆朱屈輪文盆」（図2 根津美術館蔵）を例にとってみると、円形の盆の見込み中央に円を中心にした五弁花形の文様を置き、その周囲に五つの屈輪文を放射状に配置し、その次の段では十個の屈輪文を配するという具合に全体を構成している。次に具象文のうち、花卉文では明代初期永楽期に制作された「堆朱椿文盆」（図3 根津美術館蔵）にみるように、盆の中央に大輪の椿の花を一輪置き、その周りに円く等間隔に同様の満開に咲く椿の花を五輪配している。楼閣人

物文では、「堆朱楼閣人物文盆」(図4 個人蔵)のように、見込み中央に楼閣などの主文様を、その周りに楼閣を訪ねてくる人物や楼閣の前庭の欄干、さらにその外周に近景の大胡石や松樹や柳、遠景の山々といった具合に景物を配置している。

これらの作品を観察してみると、屈輪文は文様全体の最も高い部分の高さが揃っていることは分かりやすいが、花卉文、楼閣人物文についても、主文様の最も高い部分の高さが揃えてあり、主文様が配置された部分から同心円状に水平に文様のレベルが保たれるように彫り表されていることが分かる。つまり、物を盆の中心に置くことを意識して文様が放射状に配置され、かつ浮き彫りの高さが計算されて居ることによって、傾くことなく盆の上に物を載せることができるように作られているのである。

一見、漆層を深く彫り込んで文様を立体的に見せることに主眼を置いて制作されているように見える彫漆であるが、機能面も綿密に保たれているのである。

おわりに

唐物茶入の添盆には「丸壺茶入 銘相坂」(図5 根津美術館蔵)の堆朱輪花盆のように、見込みの漆層が削り取られた例もみられる。彫漆を貴重な茶入れの添盆として用いるには、このような改変を加えなければ安定して茶入を載せることが叶わないためであろうと思っていた。しかしながら、盆としての機能性を損なわない、安定性を備えた作例を見た時、それが同心円状に主文様を配置していく文様構成と、主文様を彫り表す高さの厳格な制御によって実現されていることが理解できたのである。

見込みを削り取った作例は、恐らく経年によって漆層がひび割れ、漆層が大きく反り返るなど、彫漆に特徴的な損傷がみられたため、改変したのであろう。浮き彫りの深さにかかわらず、漆層が損傷した状態では、盆としての安定性を確保することはできない。こうした改変は、唐物茶入を載せるために彫漆盆の安定性に信用が置けないためではなく、傷んだ盆でも貴重な彫漆の盆を何とか用いるために施した、先人の工夫ではなからうか。

本稿に挙げた作例は少ないが、彫漆器における盆の機能は、文様構成によって担保されていることがうかがわれた。このことは筆者にとって、彫漆という技法がもつ立体的な表現の特徴と、器物の機能とを巧みに両立させている工芸技術としての完成度の高さを感じさせる特色であった。

註

- (1)——図録『彫漆』根津美術館 昭和五十九年(1984) 大学美術館所蔵《屈輪合子》を視座として—『漆工史』
 (2)——岡田文男「宋代の犀皮と剔犀—塗装構造の比較—」『國華』一四七一号 平成三十年(2018)、田淵可菜 (3)——図録『存星—漆芸の彩り—』五島美術館 平成
 「屈輪文彫漆器製作地についての一考察—東京藝術大学 二十六年(2014)

(文化庁文化財第一課、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2019年5月27日受付, 2020年10月16日審査終了)



图 1 丸壺茶入 銘青山 (根津美術館蔵)



图 2 堆朱屈輪文盆 (根津美術館蔵)



图3 堆朱椿文盆 (根津美術館蔵)



图4 堆朱楼閣人物文盆 (個人蔵) 図録『中国の漆工芸』より転載



图5 丸壺茶入 銘相坂 (根津美術館藏)